

肺炎球菌ワクチンについて



(1) 肺炎球菌は肺炎等を引き起こします。

地球上には、細菌やウイルスなど、目に見えない微生物が数多くいますが、肺炎球菌は細菌の中の一つです。

この肺炎球菌は、体力が落ちている時やお年寄りになって免疫力が弱くなってくると病気を引き起こします。肺炎球菌が引き起こす主な病気としては、肺炎、気管支炎などの呼吸器感染症や副鼻腔炎、中耳炎、髄膜炎などがあります。

抗生物質が効きにくい肺炎球菌が増えています。

日本においてペニシリンなどの抗生物質が効きにくい肺炎球菌の頻度は1980年代後半より増加し、現在、臨床で分離される肺炎球菌の30~50%を占めているといわれています。

(2) 「肺炎」は高齢者の大敵

肺炎は抗生物質などの薬の進歩と医療技術の向上により、かなりよく治療できるようになりました。しかし、抗生物質が効きにくい菌が増えていることもあり、高齢者の方にとっては、肺炎はいまだに怖い病気です。

特に心臓や呼吸器に慢性疾患のある方、腎不全、肝機能障害、糖尿病のある方などでは、肺炎などの感染症にかかりやすく、病状も重くなる傾向があります。

また、急速に症状が進んだ場合、抗生物質などによる治療が間に合わないこともあり、大変危険な状態になります。

(3) 肺炎球菌ワクチンとは



肺炎球菌が引き起こす病気を予防

肺炎球菌ワクチンとは、肺炎球菌によって引き起こされるいろいろな病気（感染症）を予防するためのワクチンです。

従って、肺炎球菌ワクチンは、肺炎球菌以外の原因による病気（感染症）に対しては残念ながら予防効果はありません。肺炎を例にとると、肺炎の原因となる微生物には各種細菌やウイルスなど、たくさんの種類があります。

しかし、肺炎球菌は、その中で最も重要な位置を占めている細菌です。

インフルエンザウイルスに多くの種類があるように、肺炎球菌にも多くの種類があります。このワクチンは、1回の接種でいろいろな型に効くようにつくられています。

23種類の肺炎球菌に免疫をつけます

裏に続く

肺炎球菌には **80 種類以上の型**があつて、それぞれの型に対して免疫をつける必要がありますが、肺炎球菌ワクチンを接種しておけば、そのうちで感染する機会の多い **23 種類の型**に対して免疫をつけることができます。これらの **23 種類の型**で、すべての肺炎球菌による感染症の **8 割ぐらい**を占めています。

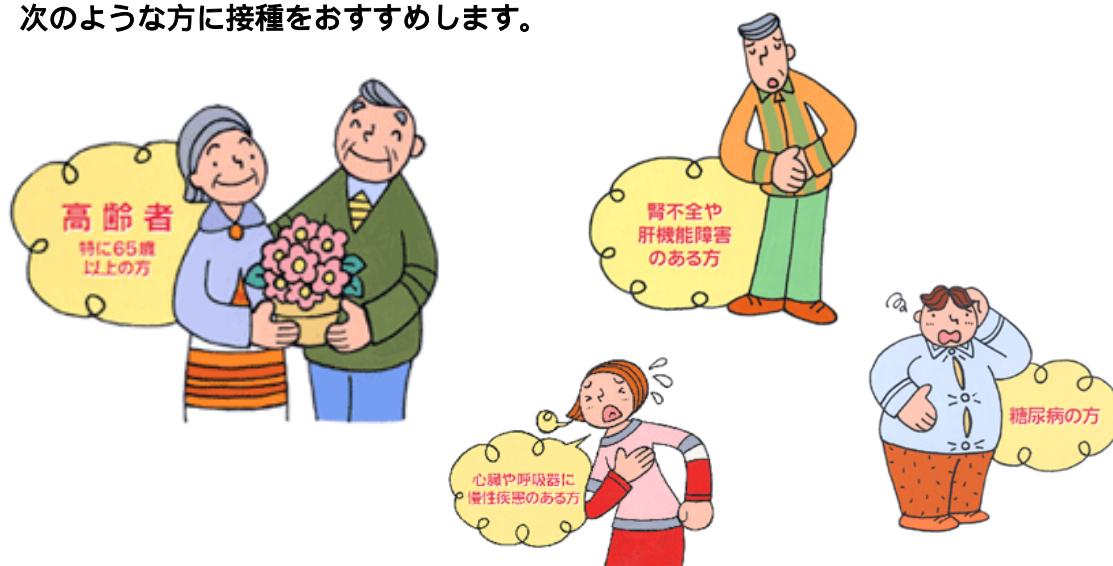
1 回の接種で 23 の型ほとんどに対し、有効な免疫ができます。この免疫は **5 年以上の長い間持続**します。

(4) 肺炎球菌ワクチンの接種

(接種に際しての注意点)

肺炎球菌ワクチン接種後の副反応 (副作用) として、注射部位の腫れや、痛み、ときに軽い熱がみられることがありますが、日常生活に支障が出るほどのものではありません。1 ~ 2 日で消失します。多くのデータにより、安全に接種できることが確認されています。ただし、過去にこのワクチンを受けたことのある人は、現在、**日本の基準では再接種 (2 回目の接種) はできない**となっており、**国で調査**研究中です。

次のような方に接種をおすすめします。



脾臓摘出などで脾機能不全のある方・・・などの方々

米国では、保健福祉省付属機関の「疾患防疫センター (CDC)」より同様の方々に対して肺炎球菌ワクチンの接種が勧告されています。

出典 万有製薬(株)ホームページの「肺炎球菌ワクチンとは」の解説より抜粋

出典：医療法人 恒信会 こやぎ内科のホームページより

肺炎球菌ワクチンについて

ここ数年で成人に対するインフルエンザワクチンの接種が定着した感がありますが、もう一つ高齢者に

有効なワクチンがあります。

「肺炎球菌ワクチン」です。最近は大マスコミにも取り上げられることが増えご存知の方も多いかと思います。

”肺炎球菌ワクチン”は肺炎球菌による感染症を予防します。名にし負う”肺炎球菌”は肺炎の代表的な病原です（肺炎の原因の約 3 分の 1 と考えられています）。

しかし、肺炎の残りの約 2/3 は肺炎球菌以外の病原体が原因で、肺炎球菌ワクチンはこれらに対しては全く無効です。

したがって「肺炎球菌ワクチンを打てば肺炎にかからない」ということでは決してありません。

しかし、それでも肺炎球菌に対する予防は非常に重要です。

肺炎球菌の感染予防が大事な理由

一言で言うと、肺炎球菌感染は死亡率が高いためです。激しい場合は数時間のうちに見る見る状態が悪化し亡くなってしまうことさえあります。

これでは抗生剤を注射しても効いている間がありません。

もちろん、全員が重症になるわけではありませんが、ご高齢になるほど、また肺気腫（COPD）をはじめとする慢性の心臓、呼吸器、肝臓、腎臓等の病気をお持ちの方で死亡率が高くなりますので、このような方は肺炎球菌感染の予防が大事になります。

抗生剤が効かない肺炎球菌

ご存知のようにペニシリンの発見は肺炎の死亡率を劇的に下げました。爾来、ペニシリンは

肺炎球菌の特効薬であり続けましたが、ペニシリンの効かない肺炎球菌が増加しています（ペニシリン耐性肺炎球菌 PRSP : penicillin-resistant Streptococcus pneumoniae と呼びます）。

現在、日本では肺炎球菌のなんと約半分はペニシリンの効かない、あるいは効きにくい菌種です。

さらに、ミノマイシンやマクロライド系、ニューキノロン系抗生剤までもが効かない”多剤耐性肺炎球菌”の

出現が問題になりつつあります。

(肺炎球菌による髄膜炎や重症肺炎ではカルバペネム系抗生剤が第一選択になっています)

肺炎球菌ワクチンは肺炎球菌感染の約80%に効果が期待されています

肺炎球菌を被うカプセルには80種類以上の型(タイプ)があります。免疫はこのタイプ別に

反応するので、これらすべてのタイプに対する免疫を獲得すれば肺炎球菌の感染対策は万全ですが、現実的ではありません。

現在日本で発売されている肺炎球菌ワクチン(ニューモバックス(TM)万有製薬)は、

これらの中から感染する機会の多い23種類のタイプの抗原を含んでいて、肺炎球菌感染の約80%に対して効果が期待されています。

肺炎球菌ワクチンは1回の接種で約5年間有効

インフルエンザワクチンの効果は5ヶ月程度しか持続しませんが、肺炎球菌ワクチンは1回の接種での免疫効果が約5年持続すると考えられています。

ですから毎年接種する必要はありませんし、日本では2回目以降の肺炎球菌ワクチンの接種は禁止されています。(外国とは事情が異なります)。

また、接種後、免疫(抗体)ができるまで1ヶ月程度の時間がかかります。

肺炎球菌ワクチンの副作用

注射をした場所の腫れ・痛み・熱感がみられることがありますが、

重い副作用の報告は非常に少なく安全性は高いと考えられます

次のような方に肺炎球菌ワクチンの接種が勧められています

65歳以上の高齢者

心臓や呼吸器に慢性の疾患がある方

脾臓を摘出してある方

腎不全や肝硬変の方

糖尿病の方

アルコール依存症

肺炎球菌ワクチン接種が不適切な方

過去に肺炎球菌ワクチンを接種したことがある方

2歳未満の方

免疫抑制剤を使用している方

明らかな発熱のある方

健康保険の適応について

2歳以上の脾臓摘出の方にのみ健康保険が適用されます。

それ以外の方は自費での接種となります。

肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチン

インフルエンザにかかった後に肺炎を発病することがしばしばあります。

そのため、肺炎球菌ワクチンとインフルエンザワクチンの両方を接種すると、

単独の接種よりも高い肺炎の予防効果があります。

最も信頼される医学雑誌のひとつである Lancet に、インフルエンザワクチンに肺炎球菌ワクチンを

併用すると入院率が減少することが報告されています (Lancet. 2001 Mar 31;357(9261):1008-11)。

これはスウェーデンで 65 歳以上の高齢者に行った前向き研究で、10 万人以上を対象にした

大規模なものです。インフルエンザワクチンに肺炎球菌ワクチンを併用することで、

肺炎での入院を 29%、肺炎球菌性肺炎での入院を 36% 減少しました。

肺炎球菌ワクチンの公費補助

全国で 20 ヶ所以上の町村で肺炎球菌ワクチン接種に対する公費補助がされていますが、残念ながら群馬県内はまだです。

(asahi.com 暮らしと健康を参考にしました)

接種のタイミング

前述のように日本では肺炎球菌ワクチンの接種は 1 度しか認められていません

(将来的には再接種が認められる可能性があります)。

そのため、接種を 65 歳でするのが良いのか、70 歳まで待ったほうが良いのか悩まれている方がいらっしゃいます。

健康に自信があれば先延ばしとなるのですが、高齢者になるほど抗体価が上昇しにくいので

打ち控えはあまり意味がないという意見があります。

私も「65 歳以上・心臓や肺に慢性の疾患がある・脾臓摘出後の方」には早めの接種をお勧めします。

こやぎ内科で肺炎球菌ワクチンの接種が可能です。

肺炎球菌ワクチンの取り寄せの都合上、受診前の電話連絡をよろしくお願い申し上げます。

自費診療の場合料金は 8,000 円です。